

釣りに釣られて

高原英夫



### 第三回「釣りはいくつになっても」

昨年のも二月の末に還暦を迎え、ほぼ三十八年間勤めた会社を晴れて定年退職となった。

話で聞くような、テレビドラマでよくあるシーンのような感傷めいたことはほとんどなく、私自身まったく意外なほどだった。自分は、もつともつと会社人間で、仕事をやめた翌日からもてあました時間をどうするのか悩むものとはぼつかり思っていたのである。

言うのもなんだが、若い頃は誰でもそう思うらしいのだそう。そもそも、生きて退職まで会社にいれるものかときえ思い続けてきた。実際、身近には、四十代、五十代で脳出血で逝った同僚や、あとわずかで退職だというのに癌を患い、退職して間もなく亡くなった先輩を二人も見ている

退職の日が、冬の最中だったので、さてまずは釣りとはいかなかったのだが、温かくなった五月に入ると、毎週のように釣りの誘いが来て、とうとういきなり五週

連続で船で釣りに出た。

しかし、釣り仲間が良い。もちろん会社の同僚達が主になっているのだが、他にも全く異業種の人たちと、いや仕事をしていた頃はライバルだった人たちとも一緒にやっている。まさに呉越同舟なのだ。

何度もいう、もう六十歳なのだ。端から見れば、いいジイ様だ。そういえば若い頃、釣りの行き帰りの車の中で、

「なんぼまで釣りできるんだろうな」

「船で座っていれればいいんだから、死ぬまでだべえ」

そんな会話を何度もした覚えがある。しかし、やはり歳を感じる。鏡に映った自分の髪の毛は真つ白だ。皺もしつかり顔面に深く食い込んでいる。いくら趣味とはいえ、朝は早いし、長い時間、波に揺られながら、エサを付けたり、切れた仕掛けをつけ直したり、せわしく船の中を動き回るのは、その時はなんともないのだが、釣り終わって下船した瞬間、ドツと体にくる。岸壁に立っていても、足元がふらつき、しばらくの間、まだ船の上にいるような揺れる感覚が続いている。脳ミソが水

の中に浮かんでいる。そんな感じが家に着いても続いている。

ところである。この歳になっても、釣りを始めた二十代のころも、釣りに行く  
と決まった日から、ましてや明日がという夜は、本当に幼稚園の運動会や遠足に行  
くような興奮が体を覆い、頭の中は、自分が針となりオモリとなり、海中深く沈み、  
あの魚がこの仕掛けを見たら、パツと食いつくんだろうか。このビーズより、この  
色のビーズの方が、目立つんじゃないのかな……。止めどもなく頭の中でそんなやり  
取りが行き来している。

今年もそうだが、はじめの二回は、夜は八時、九時に床についたものの、まんじ  
りともせず結局は一睡もできないまま、午前二時には出発となってしまった。余  
計にこの歳の体にはこたえるわけだ。

しかし、一緒に行く大ベテランの仲間も、車の中でおんなじような話になってし  
まう。

「目覚まし時計を一時半にセットしたんだが、鳴らない前に起きた。そのまま起き  
ていた」

とか、誰もがほとんど同様な話となる。だから大物ぶって、ぴつたり決めた通り寝れたなどという必要などないと思うほうがいいと決めた。それが釣りで、それが楽しみそのものでなくてはいけない。

そして六月のある日、このころともなると、三時半には薄明るくなる。だから四時には出港だ。竜飛とかで釣るとなると真つ暗いうちに家を出ることになる。

津軽半島の東側、油川を過ぎ、バイパスがきれ、蟹田へ出るといきなり陸奥湾がひらける。海岸沿いに走りながら、まず波を見る。白波があるか、ないか。ベタ風だ。ヤマセの日なんかは、幾重にも波が打ち寄せ、砂が舞い濁っていたりする。それにしても釣り場まで向かう車中の話がまたいい。もう相当前の大釣りした時の話が繰り返して出てくるのだが、互いに、いつでも昨日の話のように素直に聞けるのだ。腕の骨の髄までしみ込んだ感覚が、再現され、話すことですっかりまたその時に戻ってしまう。何度聞いても、

「うん、あの時はデッカかったなあ」

「あの時の仕掛け、思い出して作って今日持ってきたのさ」

「へば、またくるな」

床の中で眠れないで、片々と思いついたことが言葉になり繰り出てくるのだ。

この時間、つまり釣り場に出かけるまでの時が、まさしく釣り師にとつての至福の時間なのだと思う。この体中にみなぎる興奮。この感覚自体、バンバンとアドレナリンが噴出してきている感じなのだ。

何百回か数えたことはないのだが、歳を重ねたから、経験を積んだからといって、一向にこの興奮はおさまる所を知らない。いやむしろ、ますます大きくなりつつある。

時に東側の下北半島から日が昇り出す頃に出くわす、夏の日には、前の日の暑さをそのままとじ込めたぶ厚い雲が、青紫色をして低く空に浮かんでいる。これが東雲というのだろうか。おどろおどろしささえ感じるのだが、一日のエネルギーの塊にも見える。釣りへの期待が、もくもくと湧き上っている心の像そのものに見えてくる。きょうは天気もいいぞ、やるぞと。

中国の古諺で「永遠に幸福になりたかつたら釣りを覚えなさい」という言葉を前

に紹介した。暗いうちから動きまわり、まったく衰えようとしない釣りのときめき。確かにいい趣味をもったものだと思つづく思う。

そして漁港に着き、それぞれの船の各自の釣り場所に竿、クーラー、道具箱と、一財産はあろうかと思うほどの用具が積み込まれる。出船だ。ロッドキーパーを取りつけるのにも、船べりの大きさが一様ではないので、ピッタリさせるのももどかしくて仕方がない。ともかく気持ちが悪る。仕掛けは自家製の、例えばテンカラ（ウスメバル）釣りだとすると、緑色でまとめたほうがいいのか、赤なのか、はたまた白なのか思いをめぐらす。しかし。釣場まではもうすぐだ。まずは緑だと決める。サバの切り身を針に取りつけていく。逸る。逸る。気持ちを落ちつかせる方法があるのならどんなにいいのかとは思いますが、これがまた釣りの楽しみと思うしかない。船頭さんは、潮の流れ、風向きと考え、GPS、魚探を見ながら、しばらく、我々でもわかるほど近くを行ったり、来たり、回り込みながら一メートル単位のわずかなポイントを探している。

その間には第一投の準備は完了し、あとは海中に送り出すだけにしておかなければ

ばならない。

「オモリは？」

誰からともなく船頭さんに聞く。

「三百号」

と船頭さんは短く応じた。三百号と言えば一キロほどになる。誰かが大きな声で、

「三百号」

と皆に伝える。

「いいよ」

ドブンと音を立てて仕掛けはスルスルと百数十メートルの海中に沈んでいく。

竿先がオモリの負荷で下を向いているが、やがて底にオモリがついたとたん、ちようど挨拶を終え頭を上げるように、ふあんとまつすぐになる。リールを巻いて、いわゆる底をとる。

さあ、今日の釣りの成果は。

今、始まったのだ。

結果、この日は、五十リッターのクーラーがほぼ満杯となった。ソイ、テンカラ、アブラメ、ホッケも少しきた。ソイはマゾイで四十七センチあった。

そして翌週はカレイ釣り、三十七センチのマコガイを筆頭に二十枚位だったが浅場で引きが強かった。もう時間だし仕舞うころと思ったら、もう一回だけ降ろすというので針を替え、エサをつけかえ、最後の最後の一投にとおろした竿に、流れ弾にあたつたかのように四十一センチのアブラメがきた。

またその翌週、またソイ、テンカラ釣りに行った。釣れに釣れ、また五十リッターが満杯になった。まさに漁師になってしまった。

しかし何につけても、まず船頭さんの一所懸命さが釣らせてくれていると思つて疑わない。

敢えて腕などとは言わない。釣らせてもらっているのだ。そうと分かるまで三十年かかった。

平成23年1月